かみのやま 歴史・文化財さんぽ

第１９号（令和元年５月）

はるさめあん 春雨庵

あゆむ「お、いいふんいきの建物だな。」

ミドリ「わたし、“春雨庵”には前にも来たことがある。塀が新しくなったのね。」

ふみお「沢庵和尚というえらいお坊さんが来て、ここに住んだということだよね。」

あゆむ「おお、この前のたくあんづけ！」

ミドリ「それは、沢庵堰だったでしょう。」

あゆむ「あ、そうか。で、その沢庵さんが来たというのはどういうこと？」

ふみお「何だか、紫の衣がどうとか聞いたけど。」

文じい「ふむ、“紫衣事件”と言うておるの。」

あゆむ「なに、事件？　それは知りたい！」

文じい「ふむ。沢庵和尚は、実は“流罪“によって上ノ山に来たという方じゃ。」

ミドリ「流罪？」

文じい「“島流し”などともいうが、罪人を遠く離れた土地に送る刑罰じゃ。」

あゆむ「罪人にしてはいいところに住んだんだな。悪い人なのかえらい人なのかどっちだったの？　その事件というのが問題だな。」

ふみお「衣はお坊さんが着るもので、その色が紫というのは、たしか偉い坊さんが着るというようなことを聞いたことがある。」

文じい「その通りでの、仏教の教えが深くて偉いお坊さんに、朝廷から、つまり天皇からいただく衣なんじゃ。」

ミドリ「天皇からなの！　よっぽど偉いのね。ところでどこの寺のお坊さんだったの？」

ふみお「京都の“大徳寺”と聞いたな。」

文じい「そう。大徳寺は、古くからの位の高い寺で、沢庵和尚は、その第153世の住持だった。」

ふみお「僧の中でも中心になるご住職さんだな。」

あゆむ「それで、事件というのは？」

文じい「そのころ日本の国を治めていたのは、徳川家康がはじめた“徳川幕府”じゃ。」

あゆむ「ん、朝廷と幕府がどうかしたか？」

文じい「幕府にことわりもなく、朝廷が紫衣を与えるというのが気に入らなかったようじゃ。」

ミドリ「ははあ、そこなのね。幕府としては、紫の衣を与えるのは、国を治めている自分の方だと言いたいわけね。」

ふみお「あ、そういえば、なんとか法度とかいうのを思い出したぞ。」

あゆむ「なんだ、それ。ハッとするようなこと？」

文じい「フフ。“禁中並公家諸法度”などじゃな。」

ふみお「うん、そう。朝廷や寺が勝手なことをしてはいけないというきまりを、幕府が発表したんだよね。」

あゆむ「ははあ、そうするとそのきまりに従わなかったというわけだな、沢庵さんは。」

ふみお「でもそれは、沢庵和尚が悪いというよりも、朝廷と幕府の対立に巻き込まれたということじゃない？」

ミドリ「そうよね。でも結局、沢庵和尚は上山に追いやられて来たわけね。」

あゆむ「ん？　上山だっていいところだけどな。」

ふみお「ま、京都や江戸から見れば、不便な田舎ということだったんだろうな。」

あゆむ「でも、ちゃんと城もあり、殿様もいたりっぱな“まち”じゃなかったのか？」

ミドリ「そのときの殿様ってだれだったの？」

文じい「土岐頼行という若き殿様じゃった。」

あゆむ「殿様は、罪人の和尚に対してどうしたの？」

文じい「実は、頼行侯は、沢庵和尚をとても大切にもてなしたんじゃ。」

ミドリ「ふーん、それだけ沢庵和尚は立派で有名だったのね。」

文じい「そう。しかも、春雨庵というこのような建物を建てて住んでいただき、食事などのくらしの用事も不便のないように気を使ったのじゃ。」

あゆむ「へえ、いい身分になったね。」

ふみお「いやいや、沢庵和尚は必要以上のもてなしはおことわりするとか、近所の人にあげたりするというような立派な方じゃった。」

ふみお「あっ、思い出した。たしか、お城の門の前の説明板のところに、沢庵和尚と土岐頼行侯とのつながりのことがあったな。」

ミドリ「そうだわ、たしか絵があって、上中下とか何とか。」

文じい「ほほう、思い出したか。“上中下三字説”というものじゃ。」

あゆむ「上中下ぐらいはわかるぞ。でも、それが何だというんだ？」

文じい「ふむ。頼行侯は沢庵和尚をとても尊敬し、いろいろなことを教えてもらったのじゃ。禅の教えはもちろん、剣や槍の道、お茶の道、庭園づくり、工事の仕方、そして、世の中を治めることについても学んだ。」

ふみお「上は、上に立って治める人。下は、治められる一般の人たちだろうけど、中は何？」

ミドリ「中に立つ人、家来のような人たちのこと？」

文じい「ふむ、そうともとれるが、それだけならただ並べただけになる。 実は、口という字にたてに一本の線を引くと中になる。つまり、上と下をつなぐのが口。それは、よく話しよく聞くということを意味するというのじゃ。しかも、上下は、ひっくり返しても上下となるということから、もう少し深い意味にもなりそうじゃの。」

ふみお「昔の“身分制度”がきびしかった時代に、よくそのようなことが言えたね。」

あゆむ「今は、殿様も家来もないからいいよな。」

文じい「そうなんじゃが、今の世も、これからの世も、しくみをつくって進めていくのに、上に立つ人やその下で働く人という関係はある。リーダーがしっかりして、みんなと話を通わせてやっていくことが重要なことは、まったく変わりはない。」

ふみお「なるほど。うまくやれない時は、上に立つ人が交代することもあるしね。 やっぱりこれからも大事なことなんだな。」

ミドリ「そういう意味では、すばらしい方に上山に来ていただいたのね。」

あゆむ「その後、沢庵和尚はどうなった？ 」

文じい「ふむ。3 年後、2代目将軍が秀忠から、3 代目の家光に移って、罪が許され、 帰ることができた。紫衣のことも元に戻された。それどころか、家光侯が沢庵に考えを聞くという関係にまでになった。」

あゆむ「へえ。それで“たくあんづけ”のことは？」

文じい「沢庵が家光侯に、“蓄え漬け”といって差し上げた漬物をたいそう気に入って、“沢庵漬け“と呼ぼうと言ったという言い伝えじゃ。」

ミドリ「そんな和尚さんだったのね、ずうっと長くいてもらいたかったわ。」

ふみお「もっと沢庵和尚のことをしらべたくなったな。 よし、図書館に行ってみよう！」

発行： 上山市教育委員会生涯学習課文化財・文化芸術係　　電話　023-672-1111（内線 314）